

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

5

Minazuki Shizuru
水無月静琉

登場人物

CHARACTER

ベクトル

火神からタクミのもとに
送られたスカーレット
キングレオ。

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

シルフィール

タクミを異世界に転生
させた風の神様。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

タクミ・カマツ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

エレナ

水神の子で、兄・アレンと
ともにタクミに保護された少女。
格闘術が得意。

アレン

水神の子で、タクミに
保護された少年。
格闘術が得意。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェンリル。
小型にもなれる。

フイト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

第一章 王都を満喫しよう。

僕、茅野^{かやの}巧^{たくみ}はエーテルディアという世界に、その世界の神様の一人である風神シルフィールの力で転生した元日本人だ。

僕は、転生してすぐにアレンとエレナという双子の子供を、Aランク指定の危険な森であるガヤの森の中で保護した。その子供達は実は水神様の子供のようだが、何か事情があって森の中にいたらしい。僕としては幼い子を放っておけないし、二人が了承したこともあって、一緒に生活することになった。

懐^{なつ}いてくれたアレンとエレナはとても可愛らしくて、僕は実の弟妹のように接している。

そして、現在はガディアという国の王都で、貴族で騎士でもあるグランヴァルト・ルーウェン様の実家、ルーウェン家に滞在中だ。

王都に来たのはガディア国の王様に謁見するためだったが、それは先日無事に終えた。

今は王都の街を散策したり、冒険者として依頼を受けたりして気ままに過ごしている。

とはいっても、お城での用事が全部終わったわけではなく、実は今日もお城に来ていた。

何をしているかというと――

「へえ、本当にいろんなものがあるんですね」

「うっほー」

僕は宝物庫を見せてもらっている。

イビルパイパーの討伐や新迷宮を発見した褒美として、城の宝物庫から何か一品を貰えることになったんだが……リストを見ていると何が何やらわからなくなってしまった。そこで、直接宝物庫を見せてもらうことにしたのだ。

「こちらにあるものは武具の類ですね。この剣は『氷魔剣』と言いまして、ひと振りで平原を氷原に変えると謳うたわれるものです。こちらの『イカヅチ』は雷を発生させる槍。そして、こちらは……」

宝物庫を案内してくれているのは、ガデアア国で宰相を務めているコンラッド・フォード様。何で宰相様がわざわざあー!? と思ったりでしたが、場所が場所だけに、案内できるのはそれなりの地位にいる人に限られているということだろう。

それにしても……宝物庫にはありとあらゆるものがある。

今、宰相様が説明してくれたような凄すこい能力が付いた武器や、身につけた者を魔法の効果でより魅力的に見せる首飾り、他にも握り拳ほどの宝石とか……純粋に稀少きせう価値が高そうな品もあった。けれど、中には呪われた品っぽいものまである。あれには絶対に触れてはいけなくと本能が訴え

ていた。もちろん、アレンとエレナも凄すこく警戒していたよ。

そんな品々を眺め、どんなものか紹介してもらっていると――

「こちらは撮影機という魔道具です」

「ん？」

……撮影機？ え？ それって……カメラのことじゃないか!?

魔道具コーナーに差し掛かった途端、気になるものが出てきた。

「タクミ殿はこちらにご興味がおありのようですね」

「は、はい。えっと、詳しい機能を教えていただいてもいいですか？」

「構かまいませんよ。ここから見える景色をこの光の魔石を通し、専用の紙――『魔力紙』に写し取る魔道具です」

撮影機は両手で抱えないといけないくらいのサイズで、僕が知っているものより大きい。でも、レンズのような場所から見える景色を紙に……って、やっぱりカメラだね？

「こちらの魔道具自体は専門の職人であれば製作することは可能なのですが、残念ながら魔力紙の作り方が失われてしまっているため、ここにある数枚分しか撮影することができないのですよ。ですので、どちらかといえばこの魔力紙が宝物庫で保管すべき品ということになりますね」

ん、つまり、魔力紙が写真専用の印画紙みたいなものってことだよな？

「他の紙では全く写し取ることができないのですか？ 色が変化してしまうとか、歪ゆがんでしまうと

かではなく？」

「ええ、全く写し取ることがかないません」

「そうですか……」

多少色褪^あせるが、印画紙ではない普通の紙でもプリントできる、みたいなことはないのか。

この撮影機があれば、アレンとエレナのとっておきのシーンを写してアルバムが作れると思ったんだけどな。そう上手くはいかないみたいだ。

撮影機はどこかで作ってもらえるからいいとしても、とりあえず魔力紙を貰^{もら}っておくべきか。

「どうやら、もうこれにお決めになっているようですね」

「はい、そうですね。あ、その魔力紙を選んだ場合、撮影機の扱いってどうなるんでしょう？ もし、ただだけなのであれば、その魔道具を作れる職人を紹介してもらいたいのですけど……」

「ご安心ください。こちらと一緒に差し上げます。ですが、本当にこちらでよろしいのですか？ 魔力紙は数枚しかございませんよ？」

「ええ、これをお願いします」

「そうですか」

褒美の品は撮影機と魔力紙に決定した。

こういう風にたくさんあるものの中から選ぶ時、僕は迷いだと全然決められなくなってしまふ。だから、第一印象でピンと来たものにするのが一番！

「これー？」

「そう、これを貰^{もら}うことにしたよ。いいかい？」

「うん、いいよー！」

アレンとエレナの意見は全く聞かずに、僕が一人で勝手に決めてしまったが、二人は快く了承^{うけ}してくれた。

「そうだ、宰相様。魔力紙が迷宮で手に入ったとかいう話を聞いたことはありませんか？」

そうそう、これは聞いておかないと！ 製作不能なものや不思議なものって、やっぱり迷宮で手に入るのが定番だと思う。

「数件ですが、ございますね」

「本当ですかっ!？」

おお！ じゃあ、これから先、魔力紙が絶対に手に入らないというわけではないな。

魔力紙……魔力紙か……。名前からいって魔力を込めた紙だと思うが、普通の紙に魔力を込めただけ……ではないよな、さすがに。

「触れても構いませんか？」

「ええ、そちらはもうタクミ殿のもので、どうぞ」

「ありがとうございます」

宰相様の許可を得て、魔力紙を手にとってみる。

確かに、魔力紙は魔力を帯びていた。だが、魔力を保持している人や、魔力の源である魔石から発するものとは違う感じがする。

「以前は魔力紙が作られていたんですね？」

「ええ、もう数百年は昔ですが、当時は一部の紙職人が製作していたようです」
ん〜……この感じはどちらかというと、紙を作って後から魔力を込めたというより……

「……魔力を帯びたものを材料として練り込んでいるのかな？」

「タ、タクミ殿!? い、今、何とおっしゃいましたか!？」

「え？」

どうやら僕は思っていたことを口に出していたようだ。

「魔力を帯びたものを材料として練り込んだ、とおっしゃいましたよね？」

「……えっと、そうですね。言ったと思います」

「例えば、どんなものだとお思いになりますか？」

「ど、どんなもの？」

宰相様が、凄く期待のこもった目で見てくるんだけど……。

これって答えないと駄目かな? ……えっと、そうだな〜。

「やっぱり魔石とかですかね？」

「魔石！」

「え、ええ、魔石を粉にしたものを混ぜ込んで作る、とか? あとは……紙の材料って木ですよ? 魔素を含んだ木を使ったり……それこそガヤの森の木とか……」

「ガヤの木！」

僕が魔力紙の材料になりそうなものを答えると、宰相様は大袈裟と思えるほどに反応を示した。

だが――

「まあ、そんなことは専門の職人さんが既に試していますよね？」

作り方が失伝してしまったとなると、それを再現しようとする研究者や職人が少なからずいるはずだ。僕が考えつくことなんて、きっとその人達が試しているに違いない。

「いいえ! 聞いたことがございません！」

「えっ？」

「今まではどの時点で、どのように魔力を注ぐかを検証したくらいで、先ほどタクミ殿がおっしゃったように材料自体に魔素を含んだものを使うという考えがありませんでした! その作り方は試してもらった価値がありそうです! すぐに研究所と工房に連絡をしませんと! 失われた技術が蘇るかもしれません！」

「えええええー!!」

……僕はまた大事になりそうなことを言ってしまったのだろうか?

「魔石は何とかなりますが、問題はガヤの木ですね。あれはなかなか市場に流れませんから……」

ん？ タクミ殿、もしかして……所持していますか？」

「……」

「その顔はお持ちですね」

宰相様は問いかけるように言っているが、確信している表情である。

何でわかったかな？ 僕って、そんなに顔に出ているのか？

「少しお譲りいただけますでしょうか？」

「……はい、わかりました」

「ありがとうございます！」

まあ、これで魔力紙ができて手に入るようになれば、僕としても好都合だ。そのためなら、ガヤの木の本や二本……いや、十本でも提供しようじゃないか！

少し話が脱線したものの、こうして宝物庫から褒美の品を選んだ僕達は、撮影機と魔力紙をその場で貰い受けた。

宝物庫を後にした僕達は、宰相様と一緒に倉庫に移動してガヤの木の受け渡しをした。

それはすんなりと終わり、続いて城の厨房へ向かう。

約束していたクリームパン、あんパンの作り方を城の料理人に教えるためだ。

「今日はよろしく願います」

「……」

城の厨房で引き合わされた少々強面の料理人に僕が挨拶すると、彼は軽く頷いたものの、言葉は全く返してくれなかった。素人の僕がいきなり調理指導なんて、料理人の最高峰——城の料理人からしたら不愉快なことだからかな？

「料理長、陛下のご紹介でわざわざ来ていただいたのですよ。そんな人を相手に人見知りを発揮しないください！」

「えっ!？」

ひ、人見知りだったの？ しかも、この人が料理長!？」

料理長と一緒にいたもう一人の料理人の言葉に、僕は驚いて目を見開いてしまった。

いやー、僕のことを快く思っていないとか、不機嫌とかではなく、ただ単に人見知りをしていたとは……。少し前のアレンやエレナみたいに隠れるまではしなくても、似たような反応を五十歳前後の男性がすると、少し笑えてくるものがあつた。

「こんな料理長で本当に、本当にすみません！ 腕は確かですのー！」

「い、いえ、大丈夫です。気にしていませんから」

「ありがとうございます！ あ、申し遅れました。私、副料理長を務めますワグナーと申します。この度はご足労いただきありがとうございます！ ほら、料理長、挨拶くらいしっかなりなさってください！」

もう一人の料理人は副料理長だった。

副料理長——ワグナーさんはとても畏^{かしこ}まった態度で挨拶をした。

まあ、僕達はガディア国王であるトリスタン様からのご指名で来ているからな。その事情を知っているのなら仕方がない態度か？

「……カールと申します。本日はよろしくお願いします」

料理長——カールさんもか細い声だったが、しっかりと挨拶してくれた。

こんな性格でも城の料理長を務められるのは、ワグナーさんの言う通り、相応の腕があるからなのだろう。あ、あとはワグナーさんのフォローのお蔭^{かげ}かな？

「タクミと申します。改めまして、よろしくお願いします」

「アレンです」

「エレナです」

「よろしくー」

僕がもう一度挨拶をすると、すかさずアレンとエレナも挨拶をする。二人一緒にお辞儀をした後、「どう？」と言わんばかりに僕を見上げてくるので、二人を思いつきり撫^なでた。

すると、ワグナーさんが遠慮がちに声を掛ける。

「あ、あの……」

「あ、すみません。えっと、聞いているかどうかわかりませんが、今日はパンを作る予定なんです

けど……」

気を取り直して、僕は厨房の人達が今日の用件を把握しているのか確認する。

だって、今回教えるのは料理じゃなくてパンだ。なのに、この場にいるのは料理長と副料理長の二人。カールさんかワグナーさんのどちらかに、パン職人という組み合わせならまだわかるんだが……。

「はい、聞き及んでおります！ ですので、本日は我々二人に加え、パン職人が数名で指導を受けさせていただく予定です！ 生地は仕込んでおいてよいとのことでしたので、パン職人は今、仕込みに入っております」

え？ カールさん、ワグナーさん。さらにパン職人数名？ 人数多くない？

「パン職人さんだけでなく、料理長さん達もですか？」

思わず、そう口にしてしまった。

「もちろんですとも！ 万が一にも作り方などを聞き漏らしたり、聞き間違いをしたりしてはいけませんから！」

「……そ、そうですか」

何だろう……この張り切りようは……。あゝ、でも、王様や貴族とかに料理を提供するのだからこのくらいの覚悟がないと駄目なのかもしれないよな。うん、そういうことで納得しておこう。

「では、早速始めましょうか？」

「はい！ では、こちらにどうぞ！」

ここでは王族の食事はもちろん、城で働く者達の食事も作っているので、厨房はかなり広く、所属している料理人も相応の人数がいる。

ワグナーさんの案内で厨房の奥へと進むと、厨房内の人達の視線が集まってきた。

「……あれがそうなのか？」

「らしいな。だが、俺達より若いんじゃないか？」

「じゃあ、あの話ってデマなのか？」

「そうかもな」

「おいおい！ しかも、子供まで連れてやがるぞ。ここを何だと思っているんだ!？」

厨房の人達の中から、いろいろな言葉が聞こえてくる。

「す、すみません。うちの若い者が……」

ワグナーさんの耳にも届いたのだろう。慌てたように謝ってくれた。

「あなた達の神聖な場所である厨房に、子供連れで来たのは事実ですから……まあ、仕方がないですよね」

あれこれと言っていたのは、僕とあまり年頃の変わらない青年達だ。

あの年齢だと、城で働いていること自体を誇りに思っているだろう。そこに僕みたいな外部の人間が、料理長と副料理長を引き連れて堂々と闊歩^{かっぽ}していたら不快に思うよな。誰かの言葉の通り、

アレンとエレナも連れて来ているし。

「おい！ お前ら、無駄口を叩いている暇があるのか！ 仕込みは終わったのか!! ああん？

ここにある野菜の山の皮むきはどうしたっ!!」

「「す、すみません!」」

「すぐに始めろ！」

「「はいっ!」」

突然、カールさんが青年達に近寄っていき、怒鳴りつけ始めた。

さっきまでの態度とは大違いである。

「あの……すみません、カールさんって今の感じが本来の姿なんですか？」

「ああ、そうですね。さっきまでのタクミ様への振る舞いは、初対面の方だけに見せるものです。

本当にすみません。もう少し……もう少し時間が経てば、タクミ様にも普通に話すことくらいはできるようになるはずなので……」

そうか。今の怒鳴っていた姿が通常のカールさんなんだ。

口数が少なすぎて料理長が務まるかどうか密かに心配してしまっただが、そんなのは余計なお世話だったらしい。

「本当に大丈夫ですから、気にしないでください」

「「きにしない」」

その時、アレンとエレナが僕の言葉を繰り返す。

「ん？」

「んにゅ〜？」

「おやおや？」

「おやおや〜♪」

どうやら僕の口真似をして遊んでいるようだ。

「真似っこかい？」

「まねっこー」

「ふふっ、楽しいかい？」

「たのしー」

「そうか」

「そうなのー」

何だかんだ、しばらくの間、この真似っこは続いた。

「……？」

カールさんが戻ってくると、僕と子供達のやっていることに不思議そうな顔をした。

「ああ、失礼しました。カールさん、僕達のためにお手を煩わせてすみませんでした」

「……いえ、こちらこそ部下の躰がなっていないくて申し訳ありません」

僕が頭を下げると、カールさんもか細い声で謝罪を返した。

部下を叱っていた勢いはどこへやら、再び物静かなカールさんに戻っている。僕に慣れるまでにはまだ時間が掛かるようだ。

「もどったー？」

カールさんの態度の違いに違和感を覚えたのか、今度はアレンとエレナが不思議そうな顔をしていた。

「……え？ あ……すみません……お恥かしいものをお見せしました」

カールさんは子供達の言葉の意味を理解すると、顔を赤く染めて項垂れてしまった。

「えっと……いかにも料理長って感じでしたよ」

「そ、そうですか？」

「ええ」

「あ、ありがとうございます」

僕がそう言うと、カールさんはさらに顔を赤らめた。……照れたのだろうか？

「まっかー」

見なかったことにしてあげたかったが、今日のアレンとエレナは容赦がなく、速攻で指摘する。
……カールさんは、凄く恥ずかしそうに顔を背けた。

パン職人を紹介してもらうと、いよいよパン作りを開始。

パン生地の手意はしっかりとされていたので、早速、中に入れるカスタードクリームと餡あんをさくさくと作っていった。

「こんな感じなんですが……どうですかね？」

今日は粒餡つぶあんだけでなく、こし餡あんも作ってみて、調理を後ろから見ているカールさん達に味見してもらった。そして、作り方を把握できたかどうかを確認すると――

「……大変勉強になります」

カールさんが眉間に皺しわを寄せてそう言った。

言葉だけ聞けば問題ない返答なのだが……表情と合っていないんだよね。何か気になる点でもあったのだろうか？

「りよ、料理長！ 感心しているのならもつと表情に出さないと、タクミ様に誤解されますよ！――すみません、タクミ様っ！ こう見えても料理長はこのクリームや赤豆の新たな調理法に感動しているんです!!」

「えっ!? そうなんですか？」

「つて!! やっぱり誤解されていましたっ!!」

そうだね。ワグナーさんの言うようには全然見えなかったからな。そうか、あれは感心している表情だったのか……。

「「むす〜」」

その時、アレンがカールさんを指差し、エレナが目を釣り上げるように目尻を上につつ張った。敵意や悪意に敏感な子供達が気軽に接しているから、カールさんが良い人なのは間違いないんだが。というか、二人はカールさんに対しては意外と攻撃的だな。ツツコミという意味でだけ……。

「ほら、料理長！ 子供達にも誤解されていますよ!!」

そんなアレンとエレナの行動を見て、ワグナーさんが慌ててカールさんに詰め寄った。

「そ、それは……」

カールさんは言葉を詰まらせながらワグナーさん、僕、そして子供達と、順に見ていく。

「「に〜」」

カールさんに見られた子供達は人差し指で頬を持ち上げて、カールさんに笑うように促した。

「「……に〜」」

カールさんは律儀にも、口角を上げて笑い顔を作ろうとしてくれる。

「「――ぶ」」

そのカールさんの行動に、僕とワグナーさんは思わず噴き出してしまった。

直視しないように顔を逸よそらせば、パン職人達も笑いを堪こらえているのか、ふるふるとしていた。

もう一度、アレンとエレナ、カールさんのほうに視線を戻すと、子供達は満足そうにし、カールさんは顔を真っ赤にしていた。



「と、とりあえず、皆さんもカスタードクリームと餡^{あん}を作ってみましょうか」
「そ、そうですね」

僕は何とも言えない空気を変えるために、パン作りの続きをしようと持ちかけると、ワグナーさんが即座に乗って作業を再開する。

「タクミ様、そちらは？」

「ん？ ああ、これは白餡^{しろあん}とアマ芋の餡^{あん}です」

カールさんがカスタードクリームと赤豆の餡^{あん}を仕込んでいる間、僕は僕で白豆で白餡^{しろあん}を、「アマ芋」というサツマイモのような野菜をペースト状にして、さつま餡^{あん}っぽいものを作っていた。すると、ワグナーさんがそれに気づき、興味を示す。

「白豆とアマ芋……ですか？」

「そうです。これもパンの中に入れて焼こうかと思いましたが」

「次々と新しいものを……。タクミ様は本当に凄^{すご}いですね」

「そうですか？ 合^あいそうだなうって思ったものを試しているだけです。ワグナーさんも、考^{かんが}えれば何か思いつくんじゃないですかね？」

「いえいえ、それはなかなかできるものではありませんよ！」

「そうですか？」

「そうです！」

僕の場合は地球でこんなものがあつたよな、という記憶を元に試しているので、確かに有利ではある。だが、このくらいのもならエーテルディアの人でも考え出せると思うんだよな。

あ、「イシウリ」というカボチャっぽい野菜でカボチャ館とか、ゴマを混ぜてゴマ館とかも作れそうかな？ 今度、試してみよう！

カールさん達もカスタードクリームと館を作り終わったので、次にそれをパン生地で包んでいく。まあ、ここからはカールさん達本職の人達のほうが技術も手際も上だから、僕が教えることなんてないんだよね。

でも、黙って見ているのは暇だから、僕はもちろん、アレンとエレナも包む作業に参加した。

「できたー」

「そうだね。あとは発酵させて焼くだけだ」

これで本当に待つのみ。なので、待ち時間をどうしようかな？ と思っていると――

「そういえば、タクミ様。シーリンやベイリーでは、これらのパンを懇意の店で売り出していると耳にしたのですが、それは本当でしょうか？」

パン職人の責任者であるシドさんがそう尋ねてきた。

「ええ、そうですね」

「では！ 王都の街に私の兄弟子の店があるのですが、その店で売り出す許可をいただけませんか？ もちろん、利益の一部をタクミ様にお支払いますし、レシピは厳重に取り扱います

ので！」

興奮したように、シドさんが販売の許可を求めてきた。

今回ここで教えたレシピについては、国王のトリスタン様と宰相様の両名から『流出厳禁』と厳命されているらしい。なので、この場にいる人達以外は、城の厨房で働いていようとレシピを知ることができないそうだ。

その話を聞いた時、「そこまで厳重にすること!？」と思わず口走ってしまったが、逆にカールさん達に「当たり前のことです」と言われた。

まあ、僕が許可を出せば、その限りではないらしいんだけど。

「ん、利益は結構です。ただ、僕達が欲しい時に注文を受けてくれる、という条件でいかがですか？」

「それでしたら問題ないと思います！」

僕としても、王都で気軽にクリームパンやあんパンを購入できる店があれば助かるからな。

「あとは貴族との間で問題が起こらないように、お店に後ろ盾があつたほうがいいんですが……。ん、もしかすると、ルーウェン家にお願ひできるかな？ とりあえず、ルーウェン家のご当主に僕から話してみます。了承が得られましたら、改めて連絡するということでもいいですか？」

「はい！ ありがとうございます！」

たぶん大丈夫だと思うけれど、ルーウェン家に戻ったらすぐに当主のマティアスさんに頼んでみ

よう。

そう話がまとまったところで――

「失礼いたします」

侍女^{じしよ}つばい人が厨房に現れ、真^まっ直^すぐにこちらに向かつてくる。

「貴方^{あなた}がタクミ様でお間違いないませんか？」

「は、はい」

そして、侍女^{じしよ}さんは僕のことを確認した後、周囲を見渡した。

「作業のほうは一段落しているとお見受けしましたが？」

「はい、そうですね」

「では、私と一緒にいらしていただけますか」

「……はい？」

一緒に来い？ え、ということだ？

「王妃様がお呼びでございます」

えええー？ 王妃様が呼んでいるだって!?

王妃様と面識なんてない。それなのに何でだ？

◇ ◇ ◇

「ふふふ」

「……」

なぜか僕達は今、王妃様と絶賛対面中である。

王妃様はスミレ色の瞳を細めて微笑んでいる。

「おにーちゃん、くりーむぱんは〜？」

呼び出された理由がわからずドギマギしている僕をよそに、アレンとエレナは、さっきまで作っていたクリームパンの行方^{ゆくえ}を心配している。

「あらあら、大丈夫よ。ちゃーんと、焼き上がったらここに持つてくるように言いつけてありますから、もう少し待っていてね」

「うん、わかったー」

クリームパンは既に王妃様の手配済みのようだ。

「……えっと、僕達はどうしてこちらに呼ばれたのでしょうか？」

「ふふふ。それはね。もちろん、私が会いたかったからよ。そんな理由ではいけなかったかしら？」

「い、いいえ！ とんでもないことです！」

「そう？ それは良かったわ。じゃあ、これから一緒にお茶をしましょうね。ああ、私のことは

グレイスと呼んでちょうだい。ね、タクミさん」

僕は、王妃様——グレイス様が会いたかったために呼ばれたらしい。そして、その流れのままお茶をすることになった。

「そうそう。あと二人ほどお茶に呼んでいるのよね。そろそろ来る頃だと思っただけど……—あ、来たわね」

扉をノックする音がし、僕と同年代くらいの美形の青年が、これまた美形の女性を伴って部屋に入ってきた。

グレイス様がお茶に呼んだという人達だろう。

「母上、入りますよ？」

ええ!? 青年がグレイス様のことを「母」と呼んだ。

これはまずいと、僕は慌てて椅子から立ち上がろうとしたが、向かいにいたグレイス様に止められた。

「お呼びと伺^{うかが}いましたが、どうなさいましたか？」

「あら、オースティン。やっと来たのね、遅かったじゃない」

「急に呼び出しておいてそれはないでしょう。政務の合間に時間を作って足を運んだんですよ。それにアウローラまで呼んでいるだなんて、何かあったのですか？」

王妃様のことを母と呼ぶのだから、青年——オースティン様は王子で間違いないだろう。顔立ち

こそトリスタン様にもグレイス様にもあまり似ていないが、明るい金髪はトリスタン様に、スミレ色の瞳はグレイス様と同じ色だ。

「お義母様^{かあ}、お待たせして申し訳ありませんでした」

「アウローラもいらつしやい」

女性——アウローラ様もグレイス様のことを母と呼んだ。確か、トリスタン様とグレイス様の子は、王子が三人と聞いた覚えがある。トリスタン様には側室^{そくしつ}もいないらしいので、アウローラ様はオースティン様の奥さんかな？

「それで、どうなさったのですか？」

「一緒にお茶でも、と思ってね」

「え？ お茶……ですか？ ただの？」

オースティン様は釈然としない表情だ。

政務の最中に呼び出されたのに、「お茶をしよう」だなんて言われればそうなるだろうな。

「それに、そちらの方達はどなたです？」

「こちらはタクミさん、アレンくん、エレナちゃんよ。聞き覚えはあるでしょう？」

「っ！」

グレイス様の言葉に、オースティン様が僕達を凝視するように見えてくる。

「タクミさん、紹介するわね。私の息子のオースティン。そして、オースティンの妃^きであるアウ

ローラよ。ああ、オースティンは一応、王太子ね」

オースティン様は王子は王子でも、王太子様でしたか！　そして、アウローラ様は王太子妃様！

「お初にお目に掛かります。タクミと申します」

「君が先日、父と謁見をした冒険者だね！　そうか……」

オースティン様は僕達のことを知っているようだ。だが、僕達をまじまじと観察するように見て、そのまま黙り込んでしまった。

えっと……これは一体何だろうな……。

「あらあら、オースティンの悪い癖が出たわね。——ごめんなさいね、タクミさん。オースティンったら、興味のあるものをじつくりと観察する癖があるのよね」

「……」

ええー!?　じゃあ、本当に観察されているの!?

「あら、焼きたてのパンが届いたみたいね。ほら、オースティン、失礼なことをしていないでお座りなさい。アウローラもね」

「す、すみません。そうですね」

「失礼します」

グレイス様に促され、謝罪しながらオースティン様が椅子に座ると、アウローラ様も続いて腰を下ろした。

「アレンちゃんとエレナちゃんは、クリームパンがいいのかしら?」

「うん！　くりーむ!」

グレイス様は子供達の食べたいものを聞いた後、侍女に配膳を指示した。

クリームパンを手に取り、アレンとエレナは早速かぶりつく。

「おいひい」

「ふふふっ、それは良かったわ。——ああ、そうそう。それでね。タクミさんは今まで食べたことのない甘味を作るって聞いたのだけど……もちろん、私にも食べさせてもらえるわよね?」

「……もちろんですよ」

情報源はどこだ知らないが、グレイス様は甘味をご所望らしい。

というか、今日、呼び出しされた理由の本題がこれのような気がする……。お茶を一緒にしようというのも、甘味を出しやすい状況にするためだったとか?　……まあ、別にいいけどね。

えっと……グレイス様の耳に入っていそうな甘味といえば、リスナー家に教えたゼリー、どら焼き。あとはルーウェン家と他三家に教えたアイスクリームあたりだろうか?

うーん。《無限収納》にはどれも作り置きがあることだし、とりあえず全種類出しておくか。

「こちらになります」

「まあ!　どれも美味しそう」

グレイス様は目に見えて喜んでた。もしかしたら、甘いものが好きなのかもしれないな。